「航行の自由」と陸での「船」造り

田村優輝(*)・浅羽祐樹(**)

山口県立大学国際文化学部では、「国際関係論」が１年生の必修科目になっていて、前期に開講されています。

その一環として、外務省から総合外交政策局海上安全保障政策室の田村優輝事務官（当時。2013年現在、課長補佐）をお招きし、2012年５月24日に「外交講座」を開催しました。「外交講座」とは、外務省が「次代を担う大学生・大学院生を対象に最新の国際情勢や外交問題についての理解を深めていただくため、外務省職員を全国各地の大学に講師として派遣し、講義を行う[1,2]」というものです。

当日の講座は、田村事務官による講演「『航行の自由』～ある外交官の経験から～」、当該科目の担当教員である浅羽祐樹准教授とのクロス・トーク、受講生との質疑応答の３部で構成されましたが、本稿は、その中で、講演とクロス・トークを採録したものです[3]。

さらに、講座を受講した山口かおりさん（国際文化学部国際文化学科３年生）に解題「窓を開けましょう」を寄せてもらいました。

講演：田村優輝「『航行の自由』～ある外交官の経験から～」

皆さん、こんにちは。今日は階段教室で座れないくらい満員になっていて、この中で90分、集中していられるのは大変だと思いますので、できるだけ面白い話をして、皆さんを飽きさせないようにしたいと思います。今日お話することは、主に３つあります。それぞれ、全然違う話のように見えて、最後になるとつながっているといいな、と思います。

最初に「外交官という仕事」です。多くの人にとって、外交というのは見たことも聞いたこともなく、外交をやっている外交官というのはどんな人なのかよく分からない、という要素があると思います。そこでまず、私が今までどういう仕事をやってきたのか、外交官というのはどういう人たちなのかということを、イントロダクションで話したいと思います。

２つ目のテーマは「『航行の自由』を脅かす海賊」です。ちょっと難しそうな言葉ですが、今、私がやっている仕事というのは、簡単に言ってしまうと、海賊の退治です。では、その海賊というものは何なのか。今の世の中にそんなものがいるのかということも含めて、海賊の話をしたいと思います。

そして最後に、「県大生の皆さんにとっての『航行の自由』」です。これも何か謎めいた言葉ですが、せっかくここで話すからには、何か実になるメッセージを贈りたいと思っています。ですので、３つ目は、皆さんにとっての「航行の自由」とは何か、という話をしたいと思っています。

外交官という仕事

さて、そこでまず、クイズをちょっとやりたいと思います。皆さん、ちょっと手を挙げてみて下さい。１問目。外務省に勤めている人と、山口県庁に勤めている山口県職員、どっちが多いと思いますか。外務省の方が多いと思う人。結構挙がりますね。半分くらい。山口県庁の方が多いと思う人。だいたい同じくらいだと思います。

では次、２つ目ですが、日本が世界で承認している国は194ありますが、その中で、「大使館」といって日本がそこに事務所を置いている国はどれぐらいあると思いますか。まず、194全部に置いていると思う人。では、160くらいあると思う人。130くらいだと思う人。100くらいだと思う人。結構ばらけましたね。だいたい皆さん同じぐらいの数ですね。さすがに全部に置いているというのはないだろうと予想はついていると思いますが、では、答えです。

まず１問目の方ですが、実は山口県の職員の方がずっと多いんですね。山口県の職員というのは公立学校の教職員も含めているのですが、合計２万人を超える数がいます。それに対して、外務省の職員と

いうのは、実際は6000人弱。これで全世界をカバーしているのは、意外にも少ない数だと思います。ちなみに、「外務公務員」と「外交官」というのはどう違うのかですが、簡単に言えば、外務省に勤めている人たちは「外務公務員」で、その中で海外の大使館や総領事館などに勤務する人たちのことを「外交官」と呼びます。私の現在の勤務先は東京なので、厳密に言えば外交官ではないわけです。１年前までは私は海外にいて、外交官として活動していました。

聞いたことがある人がいるかもしれませんが、元々外交官がどのように誕生したかと言えば、例えばA国とB国があって、お互い仲が悪くなって戦争に発展しうる場合、全く関係がなくなってしまうと連絡も取れなくなってしまいます。そこで例外的に、「お互いこの人たちだけは傷つけ合わないで、メッセンジャーとして置いておいて、何か必要な連絡があったら、その人たちを通じてやりましょう」と、そういうルールが決まったのが外交官の始まりだと言われています。似た制度は2000年以上前の中国でも始まっていましたが、現在の制度の元になったのは中世以降の欧州で、近世には始まっていたと言われています。

日本が持つ大使館については、お手元のパンフレット『外交という仕事[4]』の裏表紙に記載されてある世界地図上で点になっているのが分かると思います。裏表紙です。この点があるのが全て大使館や総領事館といった在外公館なのですが、よく見ると分かるとおり、全世界に散っています。そして、全ての在外公館のおよそ３分の２は発展途上国にあります。日本のような恵まれたような国ではなくて、もっとずっと貧しく、治安面で問題があり、インターネットや電話もつながらないこともある、そういった国で働いている外交官の方がかなり多いと思います。

そこで、実際に私が仕事をしていた所で何をやっていたかをお話したいと思います。アフリカにガーナという国があります。皆さん、ガーナといって何か思いつくものはありますか。チョコレートはガーナチョコレートがあるので有名ですが、あれはガーナのカカオを日本に輸入しているのです。また、実は1000円札の顔になっている野口英世はこのガーナで亡くなったのです。彼は黄熱病の研究をしていた米国から、当時英領ゴールドコーストだったガーナのアクラに行ったのですが、ここで１年も経たず、自分自身が黄熱病に罹って亡くなってしまいました。今でも野口英世が務めていた研究室というのがガーナに残っていて、2010年に皇太子殿下がガーナを訪問した時も研究室を訪問されたというエピソードがある所です。

そして、横にシエラレオネと書いてある国は、さらに聞いたことがないかもしれません。レオナルド・ディカプリオが出演した『ブラッド・ダイヤモンド』という映画がありますが、その舞台になった国です。ダイヤモンド鉱山の利権をめぐって内戦が起こり、そこで少年兵が狩り出されて、手足の切断など非常にひどい事態が起きました。当時のシエラレオネの平均余命は40歳を切っていたと言われています。

では、具体的にそこで何をやっていたか、外交官の仕事というのを紹介したいと思います。

まず、政務。相手国の外務省などの人たちと人間関係を築いて、例えば「日本にこういうことを報告したい」と思った時にその情報を取ってくる仕事です。加えて、例えば「今度この選挙で日本の候補が出馬するので、ぜひガーナからも支持してください」といったことをお願いすることもあります。ここで示した写真のように新聞記事になることもありますけれども、私のように結構な若手で行ってもそれなりに面白い仕事ができるところです。

２番目に、経済協力というのがあります。「ODA」という言葉を聞いたことがあるかもしれません。ODAというと、一般的なイメージとしては「世の中にはすごく恵まれない人たちがいて、その人たちが生きるか死ぬかの瀬戸際で可哀想だから日本が援助してあげよう」と思われているところがあるかもしれません。また、そういった一般的なイメージに対する批判として、「日本の中でも貧しい人がたくさんいる。まして、東日本大震災が発生し日本の中で困っている人もいて税収も足りないのに、他の国を助けている場合か」という批判が出ていることも事実です。ODAというのは確かに「人助け」です。困っている人がいて、生きるか死ぬかの人がいる中で、日本が助けることによって、その人たちが助かれば、それは良いことです。ただ、同時にODAというのは「人助け」だけではありません。大人のずるい言い方ですが、自分のために行っています。「日本のためにODAを行っている」ということです。なぜODAは日本のためになるのでしょうか。

１つの理由として、先進国以上の経済成長率を誇

る国々へのODAを使った日本企業の進出が挙げられます。日本や欧州諸国の経済成長率は低迷していますが、ガーナのような発展途上国は上り調子の時には凄まじいスピードで発展していくのです。そこには新たなビジネスチャンスがどんどん出てきます。そういう国で「日本が援助をするけれども、ただしその援助を使う時は日本の企業を使ってください」とすれば、受注できるのは日本の企業であり、それで儲かるのも日本の企業です。日本国内の市場では頭打ちになっていた企業でも、海外に出て行って、日本の企業が受注することで日本のためにもなるのです。

もう１つの理由が「大票田としての発展途上国」です。選挙というのは、例えば学級委員の選挙から大学の理事会の選挙もあれば、国際機関でも行われます。その中で日本人の候補を推薦し、対立国、例えば中国や米国の候補がいて、さあ誰を選ぼうという状況です。多くの場合は１国１票制度で、米国のような超大国であっても１票しか持っていない。先ほど述べたシエラレオネやガーナのような小国でも、やはり同じ１票なのです。ガーナとシエラレオネを足せば２票になって、米国の１票を上回ります。もしアフリカの54カ国を全て日本支持で固められたら、他のどの大陸を固めるよりも、日本の味方になってくれます。

以上を考慮して、どこの国に対してどの程度の投資をするのかが戦略的に考えられています。援助自体はとても良いことであり人助けにはなるが、それだけではないというのが経済協力の面白いところであり、難しいところでもあります。私がこの写真の場所にいたのは27歳の時でしたが、日本の大使とシエラレオネの外務大臣の間の署名式に20代のうちから立ち会うという興味深い経験も外交官の醍醐味です[5]。

３点目は広報文化です。ここに登場する写真は、ガーナのテレビに出演した際のものです[6]。１番右にいるのが私、真ん中にいるのが私の上司の夫人、つまり臨時代理大使夫人です。旦那が忙しすぎたので「英語ができる人が来てくれ」ということになり、上司の奥さんに頼んで生放送に出演して頂きました。

ここで私たちは、3.11の大震災後の日本の現状をガーナの人たちに正確に伝えるという仕事をしました。これから早速その映像を流してみます。ただ、英語の会話で分かりにくいかもしれませんので、予めヒントを出しておきます。映像は２つ流します。１つ目は、放射能の被害に関してどのような状況になっているのか、と司会の人に聞かれ、私が答えた部分です。２つ目は、私の方からある写真を見せてガーナの人にアピールしたかったことを伝えたのですが、その部分を通じて一体私が何を狙っていたのかを見てみようと思います。英語が分かる人も分からない人もいるかもしれませんが、じっくり聞いて見て下さい。（映像）

司会：She was talking about the problems of food and water, and made reference to the radiation, the danger of radiation. How threatening is that?
田村: It actually depends on where you live. Right now we have set a zone where people are not allowed to enter within the radius of 20 kilometers from Fukushima Daiichi Power Plant, the nuclear plant which was hit by tsunami. However, as for those who are living outside of that area, the Japanese government confirmed that there is no life-threatening radioactive for them at all. Regarding the tap water, for example, some people tried their best to get the bottled water. However, drinking tap water in Japan poses no immediate health risk. That's what we can show.

今のが１つ目でした。ちょっとスピードが速かったですが、最初にまず司会の人が“danger”、つまり「危険」と言っていたのは聞こえたかもしれません。こういうテレビ番組は、多くの視聴者を惹きつけるように、とにかく危ない方向、センセーショナルな方向に報道する傾向があります。これに対して私が最初に言ったのは、「それは状況によります」ということでした。確かに、福島第一原発から20キロメートルの範囲内は今でも危ないけれども、範囲外に出たら大きな危険はない。例えば、水に関しても、大震災直後に関東地方の人たちがペットボトルの水を買いだめした例がありましたが、結局多くのペットボトルが在庫になってしまったというオチになっています。

今言ったようなことは、意外とガーナの人たちは知りません。なぜ知らないかといえば、彼らが大震災に関してニュースで見ているものというのは、「日本が危ない。津波が来た。家がどんどん流された。

原発で本当に大変になっている」という映像がほとんどだからです。その結果として、日本全体が壊滅したような誤ったイメージができてしまいます。そうなると今度は、日本の農産品の輸入を制限・禁止するなど、全く科学的知識に基づかない偏見がどんどん生まれていってしまいます。

もちろん日本国内で、いわゆる風評被害が生じていることも事実ですが、海外でそういうことがあると、長く続いてしまえば日本全体に非常に大きなダメージになってしまいます。そういうところも含めて、「日本全体が危ないという言葉を使うけれど、状況によって違うんだ」と強調しました。

では２つ目の動画を見てみます。（映像）

田村：I'm going to tell you a brief story about the road. As you can see in the the first picture, the picture was taken immediately after the earthquake on the 11th of March. As you can see, it is severely hit with those fractures and that sort of things.
司会：That was supposed to be a first-class road.
田村：Exactly, this is one of the first-class roads. That's why we tried our best to reconstruct the road as soon as possible. So, within six days time, we managed to complete the reconstruction of the road like this.
司会：So, what you are showing up there is the road that's caving, and then down, you have that road that has been redone in six days.
田村：This was done within one week time. This picture was taken in the highway going through Tohoku prefectures.
司会：That's a miracle, that you do this within six days!
田村：From my viewpoint, this is not a miracle. My idea is that this shows how professional Japanese people are in doing their best to reconstruct our country. There is no miracle happening. If there had been any miracle, then God would have never allowed the earthquake and tsunami to hit Japan.

私が見せたのは、常磐自動車道の２枚の写真でした。その写真には、震災直後で完全に壊された道路が、たった６日間で通常の状態まで復旧した様子が映っています[7]。それをまず見せたわけです。それに対して司会の人が、「これは奇跡だ」と言っていたのが聞き取れたかもしれません。私はそれに対して、「いや、これは奇跡ではない。もし奇跡が起きていたら、そもそも神様はこんな震災を起さなかっただろう」と答えています。ここでもさっき言ったとおり、何かをすごくセンセーショナルに、例えば、放射能が危ないとか、これだけ復旧できるのは奇跡だと言うのはとても容易いことですが、必ずしも実際の姿は反映していません。実際の姿を反映するためには、これは奇跡なんかではなくて、あくまで日本人がプロフェッショナルに振舞って、これだけ皆が頑張ったからできたのであって、神様がいきなり降りてきてパッと道路を直してくれたわけじゃないと伝えたかったのです。これも含めて、日本の実像を伝えるということが外交官の仕事であると思います。

それだけでなく、これは外交官だけの仕事ではありませんが、私は通訳という仕事もやっています。テレビのニュースで総理大臣や外務大臣が会談で登場する時、その隣に若いスーツ姿の人がいて、横から話している姿を見たことがあるかもしれませんが、あれはほとんどの場合外務省の職員が担当しています。例えば、このスライドは外務副大臣に海外からの賓客が来訪した時に私が通訳をしている写真[8]ですが、先方が英語で言ってきた内容を私は日本語で伝え、副大臣が日本語で言った内容を今度は英語にします。テニスでいうラリーで、そのボールを次々に打ち返す役をやるのが通訳の仕事です。ここでのポイントは、いかに正確に、分かりやすく、テンポよくやるかということが挙げられます。もちろん、間違った情報を伝えてはいけないのは当然ですが、間違っていないから難しく言っていいかというと、それでは意味が分からなくなります。１分くらい「うーん」と考えてから言おうとしても、それでは会談の通訳に使えるレベルではありません。

さらに、語学力ももちろん大事ですが、準備と度胸も大事です。準備というのは、例えば会談の場でこんな話題が登場するかもしれないと調べておいたものが、実際に会談の場で出てくると、「進研ゼミ」の漫画[9]でいうところの「これ『進研ゼミ』で見た問題だ」状態になることがあります。やっぱり予習しておいてよかったと実感します。度胸については、

隣の人がどれだけ偉い人だろうと自分は自分の仕事をするだけだ、と割り切ってやることです。

最初の部分をまとめたいと思います。まず、与えられている権限の範囲、つまり「あなたはこれはやって良いけどこれは駄目」というのは確かに存在します。公務員だから当たり前ではあります。しかし、その中でどれだけアレンジするかは個人の力量にかかってきます。さきほどテレビ番組で写真を見せたのも、「あの写真を見せなさい」と私に指示した人は誰もいませんでした。私がインターネットを見て、この写真が使えると思い、それでアピールしました。個人の裁量が試される仕事です。

第２に、語学力は必須ですが、それだけでは相手にされません。これは皆さんの将来の話にも関わってくるかもしれませんが、言葉がある程度できるというのは前提です。その言葉で何を言うかというのがもっと大事です。日本のことを知らないで、日本を代表する顔で英語をしゃべっても、それは何の意味もないということです。

３番目は、常に国益のために仕事をするという点です。先ほどODAの話で、日本がこれだけ大変なのにODAを他国に供与している場合かというような批判があるという話をしました。確かにそれだけ聞くともっともなのですが、果たしてその意見に従っていいのか、というのは全く別の議論です。例えばODAには、国際的な選挙で他国が日本のために票を入れることにつながったり、日本企業が海外進出するのに役に立つような側面もある中で、「日本が大変だからODAを止めろ」という主張が必ずしも正しいかどうかは分かりません。一見して支持を受けやすい政策が、本当に国益のためになるのかは分からないのです。

最後に、「有名人ではなく知る人ぞ知る人になる」ということです。テレビに登場する有名人や名前が売れている方がいますが、外交官にとってあまり価値がありません。それどころか、変に目立ってしまって有害ですらあります。その一方、「この分野に関しては絶対にこの人が詳しい」、例えば「日韓関係であれば浅羽先生」といった具合に、ある分野に関する第一人者として一部の人によく知られているというのが、私が理想とする外交官としての姿でもあります。以上が、私が最初に伝えたかった「外交官という仕事」です。

「航行の自由」を脅かす海賊

次に、全然違う話をしようと思います。海賊がいるのは漫画の世界だけでしょうか。現在、世界中に海賊はいると思いますか。いると思う人、手を挙げて下さい。さすがに多いですね。というのも、最初にイントロで言っちゃったからですけれども、実はいるんです。海賊は「人類共通の敵」と言われています。海賊の持っている武器は、実は相当危険です。グレネードランチャーなど、「ゴムゴムの○○」[10]といったレベルではない相当危険な武器を保有しています。海賊の狙いは商船の乗組員を人質にして、身代金を要求してお金をせしめ、さらにその船自体も乗っ取ることです。

ソマリアという国があります。アフリカの一番東の方が角みたいになっているので、そこは「アフリカの角」と呼ばれています。このソマリアは、ここ20年以上ちゃんとした政府がない国でした。沿岸警備隊もいませんから、ソマリアの沿岸から海賊が出てきて付近を航行する船舶を襲い、乗組員を人質にする事件が起きます。スエズ運河があり、ヨーロッパから紅海経由で日本方面に行く時は必ずここを通らないといけないわけです。ですから、海賊はソマリア沖に狙いを絞っています。

さて、こんな遠い所の話がなぜ日本に影響するのか説明したいと思います。日本は海洋国家と言われていますが、輸入品の95％以上を海上輸送に頼っています。飛行機で運べるものは、実はほんのわずかしかありません。ほとんどはコンテナに入れて船で運んできています。

ですから、もし海賊がたくさん出て、輸送コストが上昇し、危ないから保険も高くしようとなってしまうと、物の価格が高くなります。日本は物を輸入する側なわけですから、途中で様々なコストがかかると、どんどん値段が上昇してしまい、かなり大きな被害になります。しかも、あのルートは重要な航路で、日本人の乗る船や日本籍船も通航します。もしハイジャックされて日本人が人質になってしまったら大変な問題になります。最初に言った「航行の自由」、つまり誰でも自由に海上を航海できる権利が海賊によって脅かされてしまうと、もちろん世界全体にとっても大きな損ですが、日本にとっても非常に大きな損になります。

では、日本は何をすればよいでしょうか。まず１つ言えるのは、ソマリア沖・アデン湾周辺に自衛隊

を展開しています。2009年に派遣を開始してからもう３年以上、自衛隊の方々がここで活躍をしています。それに加えて、海賊の問題はソマリアという国自体が安定しなければどうしようもなく解決しない問題です。問題は、海にあるように見えて、陸にあります。そこで日本が今、国際機関を通じて実施しているのは、その陸の人たちへの能力構築支援です。例えば、警察官を育てたり、刑務所をちゃんと作ってその中で海賊を収監できるようにしたりする取組を行っています[11]。

皆にとって得となる「航行の自由」を侵す海賊は、「人類共通の敵」とみなされています。そして、日本もソマリア沖海賊対策に参加していますし、海賊問題の真の原因は海ではなく陸にあります。一つ付け加えたいのは、必要な対策を採れば、海賊の被害に遭う確率は相当程度下げられるということです。最近５年ほど、民間の船舶が散々海賊に襲われていました。そこで、民間の業界でも「自分たちで何とかしよう」と立ち上がり、船の一番外にワイヤーをグルグルに巻いて防衛し、船の上から水を撒いて海賊の侵入を防止する取組を行っています[12]。

県大生にとっての「航行の自由」

先ほど「航行の自由」の話をしましたが、皆さんにとっての「航行の自由」というのは何でしょうか。いきなり「皆さんにとって」と言われてもよく分からないでしょうから、一般的に船にとって「航行の自由」とは何かという話から始めたいと思います。

まず、船は自己責任の原則の下で世界中を航海できます。どこに行ってはいけない、またはどこに行け、というのは完全に個々の船の自由です。そして２つ目ですが、個々の船の目的や性能は全く異なります。当たり前ですが、ヨーロッパから日本に行く船は長距離を走る船ですが、例えば日本の近海で漁業をする船というのは小さくてもいい。それぞれ目的や用途によって船の大きさが違うし、性能が違うというのは当たり前のことです。

英語で「航行の自由」というのは“Freedom of Navigation”といいますが、ナビゲーションというのは元々、「ある方向に向かっていく」「その方向を定める」という意味です。ですから、「航行の自由」というのは、要するに、「どこに向かっても良い。ただし自己責任においてやってください」という全般的なルールを説明しているものです。

ルールを守らない船舶は制裁を受けます。これは当たり前のことですね。例えば、海上で誰も見ていないからといって、公害の原因になるような物質を投棄していたら、その船の船長は逮捕されてしまいます。このようなルールが「国連海洋法条約」という条約になっていて、皆が守らなければいけないルールとされています。不幸な船舶は海賊被害に遭うかもしれませんが、周到な準備は航海の成功に不可欠です。船会社の人と話してみると、A点からB点に行く航海が成功するかしないかというのは、大方準備で決まると言っています。つまり、現場で何とかしようと思っても、もうどうしようもないことというのは結構あるそうです。どうしようもない場合どうすればいいのか、と考える前に、事前に準備をしておきます。例えば、ここの海域は海賊が出るかもしれないから海賊の対策をちゃんとしておこうと考えます。仮に海賊が出ることが航海の途中で分かっても、ワイヤーも放水銃も何もありません。しかし、もし港を出る前から分かっていれば、その対策を事前に行うことができるのです。

では、皆さんについて話してみましょう。皆さん個々人が「船」だと思って下さい。当然、船がどこに行くかというのは個人の自己責任です。学校の先生や同級生は「あなたは将来何になりなさい」、例えば「将来看護師になりなさい」「将来外交官になりなさい」「学校の先生になりなさい」とは誰も言いません。その反面、先生や同級生は大洋であなたの面倒を見てくれません。

皆さんは今、大学にいて、自分の「船」を造っているイメージをしてみてください。卒業、つまり海に出た後は誰も助けてくれないわけです。だから在学中にやることは「船」を造ったり、ルールを勉強したり、近くの海を練習航海してみるといったことがあります。しかし、これは大学の４年間だけの話です。そして卒業した後、面倒を見てくれる人というのは残念ながらいません。

さらに大事なのは、他の「港」には同世代でより性能の良い「船」が多数いて、卒業後にはそんな「船」との間の競争になるということです。ここ山口の地は非常に穏やかで、しかも県大生の皆さんは非常にまとまっています。１学年の数も少なく、友達もだいたいこの中に収まる。とても恵まれていると思います。さきほど浅羽先生と一緒に大学の外を歩きました。例えば「ここがファミレスだ」とか、「この

喫茶店ではあまり長居できない」といった話も聞きました。この辺で生活圏が収まってしまうというのはとても便利である反面、それが必ずしも良くないかもしれないということがあります。「他の港の船」と私が言ったのは、例えば東京や大阪にいる同世代で、皆さんよりも進んだ勉強をしている人たちです。これはどうしようもない事実です。そして、皆さんが卒業した後、「大洋」に出て行くと、会う「船」というのは往々にしてそういう「船」です。そういう「船」と一緒に競争しなければいけないというのは、大学１年である今の段階から知っておいて全く損がないことだと思います。

さらに、どのような目的地を定めるかで、目指す「船」の形は全く変わってくる、ということがあります。大学に入ってからは「あなたは何になりなさい」ということを言ってくる人というのは基本的にはいません。高校までの生活指導とは全然違ったものであることは、大学１年生になった皆さんならなんとなく分かったかもしれません。そこで、例えば同級生を見ていて、「『Aちゃんが学校の先生になる』と言うから私も」といったことはあまり参考にはなりません。なぜかといえば、個々人によって「船」の「性能」、人間の場合は才能が変わってきますし、どういう方向を目指すかによって自分がやるべきことも全く変わってきてしまうからです。

私の話はここまでにして、これから浅羽先生と２人の話にしようと思います。まずはご清聴ありがとうございました。（拍手）

クロス・トーク：田村優輝×浅羽祐樹

浅羽（以下、あ）：田村さん、ありがとうございました。僕、正直、皆さんがうらやましいです。18～19歳の大学１年生のこのタイミングで、この話を聞けたというのは、非常にうらやましいですね。

今日、田村さん、午前中、羽田から山口宇部に飛行機でお越しいただきましたが、瀬戸内の穏やかな海、ご覧になったと思います。どういう印象を持たれましたか。

田村（以下、た）：そうですね。私の出身である埼玉県は海のない所ですが、色々な海を今まで見てきました。太平洋、大西洋、ガーナに行った時にはギニア湾というアフリカの海も見ましたが、瀬戸内は本当に静かな海です。もちろん季節にもよるとは思いますし、台風が来たら荒れるのでしょう、瀬戸内は鏡のように綺麗な海だと思います。

すみません、暑そうなので窓を開けましょう。皆さん、お願いします。

あ：さきほど一緒に、キャンパスの周りを歩いたんですね。食堂で一緒にランチを食べて、ファミレス、スーパー、本屋さん、看護棟の方に行って、寺内正毅の墓を見て、防府に抜ける道からコンビニに寄って大学に向かって、１周、１時間の小旅行をご一緒しましたが、その印象はどうでしょうか。

た：さっきも申し上げた通り、非常にまとまっていると思います。この生活圏の中で全てが済んでしまう。皆さんを見ていても、例えば自転車で生活している人たちも多いですし、下宿やアパートが大学の側に目立つのは、ある意味、通学を電車でしなくとも、山口線の本数の少なさを考えれば当たり前ですが、実際のところこの辺に住むのが一番楽だし、そのような生活をして４年間過ごすということだと思います。

あ：その瀬戸内の穏やかさというのは、ずっと続くでしょうか。

た：そこはですね、瀬戸内の中でずっといるという選択をする、そういうチョイスもありうるのではないかとは思います。ただ、瀬戸内の中というのは、確かにとても綺麗ではあるんですけれども、皆さん全員分を賄う仕事は到底ないと思います。つまり、ほとんどの人たちは、この外に、しかも、この後たった３～４年というすごく短い間に出て行かなければいけないということだと思います。

あ：『貧困の終焉[13]』という世界の貧困問題を扱った本の中に、「内陸国は海に面している国と比べると発展しにくい」という知見があります。ただ、同時に、内陸国でも、河川で海とつながっていて世界と交易していると発展できるという話があります。

た：山口というのは元々、戦国時代には大内氏の下で大きく育っていって、その後毛利元就が来て、し

かも明治の前に長州は幕府を倒したという新進気鋭の土地柄ではあったと思います。新しいものをどんどん取り入れていくという文化が、昔からこの地にはあったと思います。

ただその一方で、皆さんが今地理的にここにいて、ここで４年間を過ごすという条件が、全てのものが東京に集まっている現在においてプラスに働くかどうか。今の状況を考えると、地理的に必ずしも恵まれていないというのが、私の正直な感想です。

あ：今日、ムッとしますよね。山口の夏はすごくムッとします。１年生の皆さんはこれから体験することになりますが、四方を山に囲まれてた盆地なので、同じ気温よりもはるかにムッとした感じがします。風がなくて、どよんと留まっている感じがするんです。

それは気候だけではないかもしれません。さきほどの川の話ではありませんが、今日、外の風を運んでいただいたわけですが、風に乗る快適さとか、無風地帯の恐ろしさを感じたことはありますか。

た：そうですね。私の体験ではアフリカの話になりますが、私がいたガーナというのはさっき地図で見たとおり、海に面しています。ですので、昔から色々な人たちが海を通じて来ました。海の側にあるので、気温もめちゃくちゃ上がりはしないです。一番上がっても40度弱くらい。普段であれば30度ちょっとです。日本の７～８月の暑さが一年中続くというのがだいたいのイメージですが、そういう国に２年間いました。

ところが、ガーナのさらに北にはサハラ砂漠があります。そのサハラ砂漠の南の方にはブルキナファソという国があり、私がそこに行った時びっくりしたのが、気温が45度だったんです。今まで全然体験したこともないような暑さで、「なんでこんなに暑いんだろう」と思ったんですが、それは行ってみて分かりました。風がないのです。何もないところで風がなくて、気温が体温よりも暑くなる。例えば、車で移動していて「車の中が暑いな、40度くらいかな」と思って窓を開けると、さらに暑い風がわーっと来て、慌てて窓を閉めるとか、そういうことがありました。

あ：最近、『風の谷のナウシカ』がテレビで再放送されましたが、風の谷の長老のお婆さんが、王蟲が攻めてきた時に「風の谷で、風が止んだ」と。それは、平穏だった風の谷に、ある危機がやってきたことを、「風が止んだ」と表現したことを思い出しました。

た：トルメキアは大きい軍艦を持っていてすごいですよね。でも結局、トルメキアの軍艦というのは王蟲に対しては全然敵わなかったわけですね。あれはなかなか象徴的だと思います。

あ：ナウシカが持っていた武器とは何なのでしょうか。

た：皆さんがナウシカを見ているという前提で話しているんですけれど、皆さん、「風の谷のナウシカ」って見たことがある人（挙手）。すごい。この世代でも、６～７割はいますね。よく知らない人向けに言うと、ナウシカは最初のシーンで、空を飛ぶんです。それは、１人用の飛行機みたいなものですけれども、ナウシカはすごく「風を読む」のが上手いと長老のユパ様から言われています。それは何かといえば、風が吹いていても、誰もがその風に乗ってグライダーでピュンピュン行けるわけではない。ナウシカはそれがすごく上手かった。その風を使って、例えば人助けもしますし、色々活躍していくわけです。

あ：ナウシカそのものの話をしたいわけではなくて、比喩なわけですけれども、「風を読む」というのはどういう感覚なのでしょうか。

た：まず１つ言えるのは、自分自身が風に乗る能力がなければどうしようもないということです。「今、風が吹いてきた」と分かっても、そもそも飛行機に乗れなければ参加資格はない。それと同時に、自分が飛ぶのが上手いと思っていても、風を上手くつかまえることができなければ永遠に空を飛べない。

よって、そもそも自分自身に飛ぶ能力があるということが１つの条件。もう１つが、ちゃんと風に乗って、飛ぶタイミングを上手くつかまえられるということ。その２つが上手いこと重なると空を飛べるんじゃないかなと思いますね。

あ：僕も風に乗って空を飛んで行きたいと思ってい

るんですが、どちらかが欠けているわけですね。

た：浅羽先生は両方ともあるから今ここにいるんじゃないかなと私は思いますけれども。

あ：大学１年生の時に、風に乗れるようになるということと、風がどちらからどちちに吹いているのかを見極めるためには、今、何をすればいいですか。

た：私の考えを言いますと、「今はとにかく基礎力をつけろ」です。今の風の話は、最初に私が言った英語の話と似ています。英語はある程度しゃべれないとどうしようもないけども、その英語で何を言えるかというのは、また別物です。とりあえず今やるべきなのは、まず、その最低限参加資格を得るくらいまで頑張るということだと思います。これに気付いている人は意外と多くありません。しかも大学１年の時に気付くというのは、あまり多くないと思います。

あ：参加資格というのは、例えば、TOEICを600点にすることでしょうか。

た：そういうふうに考える人がいるかもしれませんが、しかしいくらTOEICの点が上がったところでそれで何を使えるか、英語を用いて何を言えるかという、元々の自分の基礎となるところがないとどうしようもありません。

浅羽先生の授業では、新書の紹介をしているそうですね。「これ１冊読んどいてね」と。その１冊自体はそれほど分厚くはないと思うのですが、ただ１週間の間に読むというのは、正直面倒と思うかもしれません。ここで先生がパッと１冊出しているというのは、別に嫌がらせをするためでも、読書感想文を書かせるためでもありません。それが少なくとも、皆さんが今後どういう分野に進むにしたとしても、ある程度必ず持っておかなくてはいけない部分というのはあって、まずそこの部分を鍛えているんじゃないかなと私は思います。

あ：田村さん自身、最近読んだ新書で印象深いのは何ですか。

た：最近読んだ新書ですか。『日中国交正常化』という中公新書の本がめちゃくちゃ面白かったですね。

あ：面白いですよ。中公新書、『日中国交正常化[14]』、お勧めしておきます。

た：これね、本当に面白いんですよ。トリビアがすごく面白いです。皆さん、日本史か世界史で勉強したかもしれませんが、日中国交正常化というのは、1972年に田中角栄という総理大臣が中国に行って、台湾との外交関係を終了させ今の中国と国交を結ぶんです。その時の中国側の気合いの入れ様が半端なかったということが、この本を読むと分かります。例えば、田中角栄がどのような食事を好きかというところまで中国側は偵察していました。田中が北京に来て、晩餐会や朝食の場で、まさにその田中の地元の食事を出していた。これは何かというと、中国側は「そこまであなたを大事にしていますよ」というメッセージと共に、「私たちはあなたのことをそこまで知っていますよ」というメッセージです。1972年なので今から40年前ですが、40年経ってようやく舞台裏が本になって分かってきたというのは、本当に知的興奮を覚えるというところです。

あ：「ケツの穴まで知ってるよ」ということですね。

た：なんというか、恐ろしいんですよ。「何でそんなこと知ってるの」っていうくらいまで。例えば、晩餐会で音楽の演奏をするのですが、その音楽が日本の民謡だったりするんです。ちゃんとそこまで調べていて、そこで演奏するのが効果的だと中国が判断したことが史料によって分かった点が非常に面白いと思います。

あ：我々の国際文化学部は「文化の交流・創造・発信」を掲げています。「交流」、まあ食事をするわけですよね。食事をする時にこういう姿勢で臨んでいるのか、「ああ、美味しい美味しい」と食べているのか、この差ですよ。

た：中国で日本のものが出てきて「美味しい美味しい」と食べられる図太さはある意味で大事だと思いますが、その中で気付くこともあります。例えば皆さんが海外に行って、ご飯をホームステイ先のホストマザーが出してきて、そこに山口の外郎が出てき

たら、それはびっくりしますよ。それと同じようなことを40年前に日本の首脳たちが味わったという、なかなか面白いエピソードです。

あ：この後の夕食会で田村さんの好みのものが出てくるか、僕の調査能力がばれちゃいますね。

た：なかなかそこは明らかにしないようにしていますので。

あ:「交流」といっても、こういうレベルの交流も「交流」だということですね。ご飯を一緒に食べて、「わー、ハッピー、楽しい楽しい」だけではないということだと思います。

た：もちろん、楽しく過ごす交流というのは、とても大事なことですし、それをやるために今ここに来ているという人たちも中にはいると思います。ただ、「楽しかったね」だけで終わってしまってはあまり意味がないですし、今後の皆さんの卒業後のキャリアに結び付くかというと、そうでもない気がします。ですから、「交流」を通じて一体自分たちは何を学べるのか、何をそこで学んだのか、何が足りないから、これからもっと何を勉強したいのかということを、敏感にいつも考えるようにするのが大事だと思います。

あ：今、田村さん、おいくつですか。

た：私は今、29歳です。

あ：29歳。皆さんより11歳年上ですね。今、29歳の田村優輝として、何を勉強したいですか。あるいは、していますか。

た：今、勉強しているのは国際法ですね。仕事でしばらく海外にいて、全然国際法を見てなかったんですけれども、帰ってきて今やっている仕事というのは、日々、国際法との戦いです。私は学部時代に法学部だったので国際法を勉強しましたし、それで覚えていることもありますけれども、実務で使うレベルの国際法というのはそれをはるかに抜けた最先端のことで、先生方も教科書に書いてないようなことです。そうなると、今、勉強しないといけないと思っています。

あ：大学で学んだこと、書いてないこと、だから突き抜けたことを今、されているわけですけれども、大学で学んだことが、今、どう活きていますか。

た：大学で学んだことがどう生きているか、パッと出てくる例の方が稀だと思います。皆さんが今、１年生や２年生で勉強していて、そこでやっていることが仕事にすぐに活かせる方がレアケースだと思います。ただ、大学で学んだことを活かせる機会は意外と忘れた頃にやってくるんですね。

あ：学んだことそのものなのか、あるいは、新しいことをゼロベースで学ばないといけない時に、学び方そのものを学んだということなのか、どういうレベルなのでしょうか。

た：両方ともあると思います。１つは、知識自体が後で、10年後にバッと出てきた場合。その時は、さっき言った「『進研ゼミ』でやってて良かった」「テストで出てきた」みたいなことがあるかもしれませんが、その方がレアケースです。むしろ、１つの学問に取り組むことで、そもそも、学問をやるというのはどういうことで、どういうことをやってはいけないのかなどの一般的なルールを学べることがあります。一般的なルールを学ぶというのは、だいたいどんな学問をやるにしても、考え方というのは、ある程度共通しています。「反証可能性」といいますが、そのルールはいつも通用するのか、それとも、通用しない時もあるのか、といったことをこつこつ調べていく。

例えば、ある人がAというセオリーを出してきたら、そのAに対して別の人が「いや、こういうことではこのAというセオリーは使えませんよ」と反論してくる。学問はだいたいこれの繰り返しですが、１つ学問をやっておくと、将来全く違う分野をやった時にも活かせることがあります。

あ：空手の型のような基本的な動作や振舞い方が身につくのでしょうか。頭の中に。

た：そうですね。私は昔、合気道を少しやっていましたが、その際、型として学んだことは他のことに

活かせると思います。型というのはなぜ型で残っているのかというと、それが洗練されていて、ある種の完成形だからだそうです。何もないところから、１からやろうとすると、だいたい変な方向に行ってしまうんですけども、皆さんが今見ている入門用の教科書というのは、過去100年～200年、頭の良い人たちがいろいろ考えた結果「これがとりあえずスタンダードだ」と落ち着いたものなので、教科書を読むことで良いとこ取りができます。今の時代に、この教科書が読めるという美味しいところだけを手っ取り早く取れるメリットがあります。

あ：そういう「ここだ、近道だ」みたいなことはどうやって見つけますか。

た：「近道はここだ」というのは人にもよります。近道なんていらないよ、という人も中にはいます。自分で頑張って、見つけて、それが自分の方法だと。たぶんノートの取り方とかもそうだと思います。よく市販の本で「こういうノートの取り方が良い」とか書いてありますが、私は一切そういうのは見ません。自分のやり方が一番良い方法ということがあります。ですので、必ずしも近道を見つけることが良いとは限らないと思います。

あ：どの本を読んだらいいのか、最初分わからない時に、最初に手にとる１冊とか、最初に尋ねていく相手というのは、トンデモの人を最初に尋ねてしまうと、「ナビ」は「方向を定める」ということだとお話の中にありましたけれども、全く違う方向に行ってしまったりしませんか。その時に「この人だ」だとか、「この一冊だ」というのはどうやって見つけますか。

た：今、浅羽先生がおっしゃったのはどういうことか、解説します。何かを学びたいと思った時に、最初に出会う人に道を聞きます。「どっち側に行けばいいんですか。右ですか、左ですか」というふうに。その人が全然違うことを言ってしまい、最初から変な方向に行くと、そこから先の修正は難しいです。ですので、最初が肝心です。

最初が肝心の例の１つとして、学部棟に新書がたくさん置いてあるコーナーがあり、「皆さんここで読んでください」というシールが貼ってあったと思います。あの試みは非常に良いと思います。なぜかと言うと、先生が「この本を読んでおけば間違いない。この分野でさらに知りたければ、もっと詳しい本を読んで欲しいけれども、まず気軽に何も知らない状態から何かを学びたいと思った時に、この薄っぺらい新書を読んでみよう」というのは、非常に良いステップだと思います。

あ：皆さん、今、「基礎セミナー[15]」で本をまず１冊読んで、感想文を書こうというのが先週、先々週あったと思います。C館の２階の学部事務室の隣にストックされてますよね。そこをご一緒したんです。

た：皆さん、あんな美味しいところがあるんだったら活用しましょう。美味しいところ取りがギュッと詰まっているところだと思うので、それは活かさない手はないですね。

あ：今、お話を聞いていて、この「国際関係論」は国際文化学部１年生の必修科目で、しかも前期にある科目で、本当に私が最初の入門の担当でふさわしいのか、と怖くなりました。

た：先生はこの大学に６年もいらっしゃるわけですから、導き方というのは分かっていらっしゃいます。最初にやることは、ちゃんと方向を定めて、そこから先の「船」の性能を定めます。どのような「船」かは、何を目指すかによって全く変わってくるわけで、必ずしもゴツい船を造る必要はありません。例えば、日本近海にいるのならば、少し軽くてもスピードが出る船。そういうカスタマイズは自分たちでやれるんですが、まずは前提条件としてある程度の知識がないとどうしようもないというのはあると思います。

あ：海賊対策の部局で今働いていて、海賊に出くわしたとしても、準備をしておくとそれなりに対応が可能だということも、海賊の話に限らず、あらゆることを始める前にどれだけ準備していたかによって変わってくるわけですよね。

通訳している最中に、「お、これ、「進研ゼミ」のあの感覚だ」みたいなことがパッと浮かぶわけですか。「きちんと準備をしたことが来た！」とか。

た：もちろん、その準備は徹底的にやっておきますが、それだけでは足りない、脳みそだけでは足りない部分というのがあります。そこでちょっと裏技があります。

さっきスライドの中で、通訳時に私がメモ帳を持って下を向いていたのを写真で見たかもしれませんが、実はあれは特殊構造になっています。ファイルを開くと端の部分に単語リストが書いてあります。その単語リストというのは、「こういう話題が出るかもしれないからこういう単語をピックアップしておこう」と自分で考えて、前の晩とかその前の晩くらいに自分で仕込んでおきます。これをやっておくと精神安定上全然違いますよね。知らない単語がきたらどうしようとドキドキして通訳するよりも、ある程度準備して、分からなかったらここを見ればいいと思います。

通訳している場合、辞書を引く時間というのは全くありません。いちいち電子辞書を開けて調べる暇はないから、事前の準備というのが大事だと思います。通訳でメモに用いる方は白紙なんですけれども、反対側には細かい字でたくさん単語のリストが書いてあります。その単語リストは結局使われないかもしれませんが、使われた場合は「よっしゃラッキー」というような感じに内心思ってやっています。

あ：それでも、「海賊」に出くわさないわけではないですよね。

た：まあそうですよね。海賊のアナロジーに戻りますと、それでもどうしようもない時というのはありますね。

あ：そういう時は、度胸ですか。

た：そこは度胸です。いくら事前に準備をしていても、通訳をやっていてどうしようもなく、例えばその単語自体を知らないとかいうことは当然あります。そういう時に私がどうするかといえば、いかに回り道をしつつもその単語に近い言葉を絞り出すかを瞬時に考える、ということだと思います。

あ：逆に、通訳の経験に限らず、準備不足で失敗してしまったということはありますか。

た：たくさんありますよ。私も学部の時、良い学生じゃなかったので、もうちょっとちゃんと準備しておけばできたのになあと。例えば教科書のこのページのこの辺に書いてあったような気がしたんだけども、そこに書いてあった内容は忘れちゃったな、といって結局テストで書けなかったという悔しい思いをしたことは何度もあります。

あ：田村さんにとって、良い先生とはどういう先生でしたか。いらっしゃいましたか。

た：幸い、良い先生には何人も会うことができました。私にとって良い先生というのは、手取り足取り「ああしろこうしろ」と言ってくる先生ではないです。私は体育会系ではなかったので、熱血先生はあまり好きじゃなかったです。「気付き」、つまり「ああ、なるほど。そういうことなのね」とか「そういう見方もあるのか」ということをどんどん教えてくれる先生というのは、すごく良い先生でした。

あ：なるほど。田村さんみたいな学生を授業で持つと、先生にとっても、それこそ「気付き」がありますね。

た：「気付き」というのは結構先生にとって大変だと思います。だって「あなたはこういうふうに言ってるかもしれないけれど、でも先生、私は思うんです。こういう考え方もあるんじゃないですか」とぶつけてくる学生というのは、先生の側からしてみたら面倒臭いなと思うかもしれません。反面、そういう学生を見つけるというのは、先生にとっては特権というか、「こういうことに気付いてくれる学生もいるんだ、嬉しいな」というふうに思います。皆さん、どんどん浅羽先生にぶつけましょう。

あ：改めて、１年生のこのタイミングで、この話を聞けた皆さんのことをうらやましく思います。今日は、様々な「気付き」のチャンスをいただき、本当にありがとうございました。

受講生の解題：山口かおり「窓を開けましょう。」

「窓を開けましょう[16]。」この言葉は、田村さんがクロス・トークの最中に私たち学生に向けてくださった言葉である。言葉のとおり、私たちは教室の窓を開けたが、私にとってこの短い言葉こそが、田村さんが私たちに向けた最も重要なメッセージであったと確信している。

「地面」がなくなった。講義を聞いた直後の私の感想である。今まで自分が自分で踏みしめていると信じていた「地面」が、田村さんと浅羽先生の言葉によって急になくなり、誰もいない、まさに「鏡のような穏やかな瀬戸内海」に落とされた心地がした。今、私が造っている船は、どんな船だろうか。どんな船かは大学を卒業して、社会人になり、他の船と競わないとわからない。もしかしたら軍艦を造ることができているかもしれないし、古びた木材でできたイカダかもしれない。だからこそ、私たちは与えられた４年間を有意義に過ごさなければならない。地理的に不利な、穏やかな海にいることだけは忘れず、「どうすれば戦えるのか」を考えながら、日々を過ごさなければならないと強く感じた。

では、具体的にこれから何をどうすればいいのか。この答えも、しっかりとクロス・トークの中で２人は私たちに教えてくれている。「窓を開けること」。これこそが答えである。『風の谷のナウシカ』という誰しもに身近であろうアニメを喩えに、田村さんと浅羽先生は私たちに答えをしっかりと示している。しかし、この答えに気付くことができた学生はあの場に何人いたのだろうか。私は幸いにも何度もこの講義を聞きなおす機会を与えられ、気付くことができた。同じ言葉の中にも、異なる意味がいくつも見え隠れする。メタ・メッセージに気付くことができるかどうか、このことがまさに風に乗れるかどうかということに直結すると言える。クロス・トークの途中で、田村さんが「窓を開けましょう」と私たちに促した。まさにこの一言に全てが含まれているのだ。田村さんはさらに言葉だけでなく「行動」を促すことによって、私たちに答えを与えてくださっていた。

いくら強く丈夫な船を造っても、海に浮かべるだけでは前には進まない。波に流されるだけである。風を読まなければ、いくら航行の自由があっても、目的が決まっていても、進むことができない。船に素晴らしいエンジンをつけたところで、タイタニックのように氷山にぶつかって沈むかもしれない。だからこそ「風」を読む必要があるのだ、と強く感じさせられた時間であった。

同時に、「どれだけ風を読むことができても、風に乗る力がなければ意味がない」という講演中の言葉のとおり、どれだけ風を感じても、風に乗ることができなければ意味はない。瀬戸内海の穏やかな海にいる私たちは、風を読むことはもちろん、この風に乗る力をしっかりと自分で育てなければならない。

私たちは自ら風を吹かせることはできないかもしれない。そして、鏡のように穏やかな瀬戸内海には、乗れるような風が吹くことはないかもしれない。今、私たちにとって最も大切なのは、風が吹きこむ「窓」を探すということなのである。

今回の外交講座の中には、私たちのこれからの人生にとって重要なエッセンスが数多く盛り込まれている。それは、『ONE PIECE』や『風の谷のナウシカ』といった私たちにとって身近に感じるものに巧妙に隠されているが、実は厳しく、切実なものとして突き刺さってくる。このメッセージに気付くことで、風を読み、風に乗ることの重要性もまた切実なものへと変わってくるのだ。最後に私は、この講座の受講生を代表してもう一度、田村さんからのメッセージを自分自身に言い聞かせ、解題を締めくくる。「窓を開けましょう。」

解題の解題：浅羽祐樹

その窓には、鍵がかかっていたわけでもないのに、促されるまで誰も開けようとしませんでした。この採録を風が吹き込む窓としてほしいと願っています。

註

（＊）外務省総合外交政策局海上安全保障政策室課長補佐
（＊＊）山口県立大学国際文化部国際文化学科准教授
1 外務省「外交講座」http://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/shiritai/gaikoukouza/ichiran.html（最終アクセス：2012年12月12日確認） 以下、ウェブサイトを引用する時は、特に記さない限り、同日に最終アクセスを確認している。
2 山口県立大学における実施報告については以下を参照されたい。http://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/shiritai/gaikoukouza/2012/0524-01.html
3 以下の講演及びクロス・トークにおける田村の発言は個人的見解を示すものであり、日本政府の公式見解を反映するものではない。
4 当日配布されたパンフレットと全く同じものを以下のサイトでダウンロードできる。http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/pr/pub/pamph/gaikoutoiu.html

5 シエラレオネへの経済援助については、外務省ODAメールマガジン第165号「主なき「ライオンの山」の現在－シエラレオネ共和国－」（2009年8月12日発行）も参照。
http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/mail/bn_165.html#02
6 ガーナのテレビ局Multi TVのニュース番組「PM Express」（2011年4月9日）に出演。 http://www.facebook.com/photo.php?fbid=205628552794943&set=a.165940413430424.38342.165531623471303&theate
7 田村が取り上げた2枚の写真は、例えば以下のサイトで閲覧できる。
http://jalopnik.com/5785281/japan-fixed-this-quake+damaged-road-in-just-six-days
8 外務省プレスリリース「セズィベラ東アフリカ共同体（EAC）事務局長による山根副大臣表敬」（2012年2月8日）の写真を紹介した。詳細は以下のサイトで閲覧できる。
http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/release/24/2/0208_03.html
9 ベネッセコーポレーションの通信添削教材「進研ゼミ」のダイレクトメールに添付される漫画では、主人公が学校の試験中に「これ、進研ゼミで見た問題だ」と気付くカットが定番として用いられることで知られている。詳細は以下のサイトで閲覧できる。
http://chu.benesse.co.jp/manga_portal/index.html
10 尾田栄一郎『ONE PIECE』の主人公であるルフィは、作中で「ゴムゴムの実」を食べたことで身体を伸縮させた攻撃が可能になったという設定である。
11 日本政府によるソマリア沖海賊対策の取組については以下のサイトを参照。http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/pirate/africa.html
12 商船業界による海賊対策はBMP（Best Management Practices）として蓄積されている。最新版であるBMP4は以下のサイトで閲覧できる。
http://www.mlit.go.jp/common/000168535.pdf
13 ジェフリー・サックス（鈴木主税・野中邦子訳）『貧困の終焉：2025年までに世界を変える』（早川書房、2006年）
14 服部龍二『日中国交正常化：田中角栄、大平正芳、官僚たちの挑戦』（中公新書、2011年）
15 初年次教育の一環として、学部学科を問わず、全学の次元で実施している必修科目。山口県立大学に入学すると、1年生前期に「基礎セミナーI」、1年生後期に「基礎セミナーII」を受講する。
16 クロス・トークにおける田村の最初の発言。